



復活徹夜祭 (ルカ 24:1-12)

イエスは復活し、助けが必要な人のそばにおられる

主のご復活おめでとうございます。今年の聖週間は、百人隊長の言葉にヒントをもらって福音朗読を黙想してきました。引き続き、百人隊長の視点で復活の出来事を切り取ってみたいと思います。

「本当に、この人は正しい人だった。」 (ルカ 23・47) 百人隊長はイエスの十字架の場面で、「群衆の目に映っていたイエス」ではなく、「真実のイエス」を見抜いていました。今日の福音朗読では天使が同じように婦人たちの目に映ったイエスではなく、真実のイエスを紹介しています。「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」 (24・6)

百人隊長が見抜いたイエスは、「苦しみの中でも人々と共におられるイエス」でした。群衆はイエスを罵り、死へと向かわせました。自分たちから遠ざけたい罪人にしてしまいました。しかしイエスは、死の間際まで、苦しむ人と共に苦しまれる方となられたのです。

「十字架から降りて自分を救うがよい。」望めばそれも可能だったでしょう。しかしあえてイエスは、苦しみと死を受け入れ、かたわらで一緒にはりつけにされた犯罪人など、誰もそばにいてあげられない死の淵にいる人々に寄り添う方となられたのです。百人隊長は、あえて降りることをしなかったイエスに、「本当に、この人は正しい人だった。」 (ルカ 23・47) と自分に正直に語ったのです。

今私たちは、婦人たちと同じように空の墓の前に立っています。目の前の事態と、真実の事態とは違います。イエスは常に、そばにいてくださる方でした。今、空の墓の前に立って、どのように「常にそばにいてくださる方」を想像すれば良いのでしょうか。天使がそれを教えてくれました。「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」

イエスは常に、そばにいてくださいました。そうであるなら、死者に結びつけられた姿を探してはなりません。今この時点で、イエスが常に共にいてくださる場所を探さなければなりません。どこにイエスを探しに行けば良いのでしょうか。

そのヒントは、婦人たちがイエスの遺体のお世話をしに来ている同じ時に、飼い主のいない羊のように打ちひしがれているのは誰か考えれば分かります。イエスは常に、共にいてくださる方でした。今この時点でもそうであるなら、イエスは、弱り果て、打ちひしがれている人のそばにいるはずです。そこでイエスと会えるはずです。

この時点で最も弱り果てているのは弟子たちでしょう。打ちひしがれ、家の戸に鍵を閉めて、閉じこもっていたのです。天使の言葉は復活したイエスを捜し当てるヒントとなりました。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」 (24・5-6) 生きておられるイエスは、常に、共にいてくださる方なのです。

私たちも、今日の復活の喜びを自分の中にとどめるだけではなく、かつて百人隊長がみずからの言葉で信仰表明したように、信仰表明しなければなりません。百人隊長は、「はりつけにされたイエス」という目の前の事態の向こうにある真実を見抜きました。

私たちも、目の前に見えているのは十字架にかけられたイエスです。復活したイエスを見ることはできません。けれども、イエスが常に、そばにいてくださる方であるなら、今いちばんそばにいて助けを必要としている人を訪ねてみてください。私たちはそこで、復活したイエスに出会おうでしょう。

そして体験を通して、「イエスは復活し、いつも共にいてくださる」と信仰表明しましょう。私たちの声で届けられる信仰表明を必要としている打ちひしがれた人、弱い立場にある人が、新しい元号が始まろうとするこの日本に、まだまだたくさんいらっしゃるのです。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）